

多田野奨学生

匿名希望者（神戸大学2年）

「解剖実習を経て」

大学に進学してから一年があっという間に過ぎ去り、この4・5月は二回生の目玉科目ともいえる解剖学に追われていました。無事座学も実習も終え、一段落ついたところだったので、医学科を目指す後輩に想像を膨らませてもらえるかと思い、この内容で奨学生レポートを書くことにしました。

ほかの大学では仕組みが異なると思うのですが、私の大学では新学期が始まると同時に解剖学の座学が始まり、ジャンルごとに区切られた講義を一日で2～4つ受け、講義を受けた次の日かその次の日にテストが行われます。一晩でその範囲を覚えなければならず、夜か朝かわからない時間までタブレットに引かれたなかなか消えない赤い暗記マーカーと戦っていました。一度テストで落ちると追試があるのですが、追試はその別の範囲のテストと同じ日にあることも多く、負のループに入り込まないように頑張ることで必死でした。ですが、部活は休めないうえにバイトもしたかったので部活のあった日はその分遅くまで勉強したり、土日はバイトをしたり、密度のとても濃い期間を過ごしていました。

座学がすべて終わると休む間もなく解剖学実習が始まります。6人で1班になり、ローテーションでそのうちの4人が実習、2人がリモートでそれを見ながらレポートを書きつつ実習室をサポートするという仕組みになっています。班員や先生と協力しないとスムーズに実習が進まないため、たくさんコミュニケーションをとることが大切でした。

実習が始まる日、慣れない青いガウンと長靴を履いて、何とも言えない香りのする、ひんやりした実習室に足を踏み入れました。実習台で初めてご献体と対面したときは、緊張と冷静でいなければいけないという思いが入り乱れていました。そこから五月の末まで実習が続き、全身の解剖をさせていただきました。最後の納棺の日に、解剖させていただいた方のご家族が用意された棺の中に入っていたその方の思い出の品であろう物たちを見て、私の祖母のお葬式を思い出しました。この方もたくさんのご友人やご家族に別れを惜しまれながらご献体としてこの実習室に運ばれてきたのだと思うと、医学生に解剖実習をさせていただく機会を作っていただいていることに対して改めて感謝しなければならないと感じました。

振り返ってみて、やはり実習では座学で得られないものがたくさん得られると実感します。実習では、教科書で見たものがそのまま観察できて感動する部分があれば、教科書とは違う構造をしていて感動する部分もありました。人間の体は基本的に共通していますが、全く同じではありません。血管の走行や神経の分岐の仕方、臓器の繋がり方や大小は本当に人それぞれです。その違いが病気を生み出すこともあれば、全くそんなことがない場合もあります。基本構造から外れていても生きられると考えると生命のつくりってとても不思議だと思いませんか？

一年生の間は教養科目と、高校の生物の内容に近い基礎医学の科目しか勉強しておらず、自分が学びたいと思っていた医学にほとんど触れることなく過ごしたため、いきなりの解剖学についていくのは大変でした。ですがその期間のおかげで、まだまだ詰めが甘いですが、四月の初めには何一つとして知らなかった体の構造の知識を得て、医療者としての自覚も芽生えてきました。今は組織学という新たな視点で正常の細胞や組織はどういう形態をしているのか、顕微鏡で観察するといった勉強をしています。まだまだ医者になる日は遠いですが、目の前のやるべきことに取り組み、成長していきたいと感じています。